



TITLE:

# 一六世紀前半のグジャラートとポルトガル:港市ディーウをめぐる諸関係

AUTHOR(S):

眞下, 裕之

---

CITATION:

眞下, 裕之. 一六世紀前半のグジャラートとポルトガル:港市ディーウをめぐる諸関係. 東洋史研究 1995, 53(4): 704-742

ISSUE DATE:

1995-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154506>

RIGHT:

# 一六世紀前半のグジャラートとポルトガル

——港市ディーウをめぐる諸關係——

眞 下 裕 之

## 序

一 ディオゴ・ロペス・リッセケイラの遣使

二 スルターン・バハードゥルのディーウ掌握

A 卽 位

B ディーウ掌握

## 三 抗爭の諸局面

A チャウル攻撃

B 一五三一年ディーウ攻防戦

C ポルトガル側の戦略轉換

## 四 パッセイン割讓へ

A 交渉の打診

B マリク・トガンの交渉

C ディーウ會見の設定 交渉の決裂

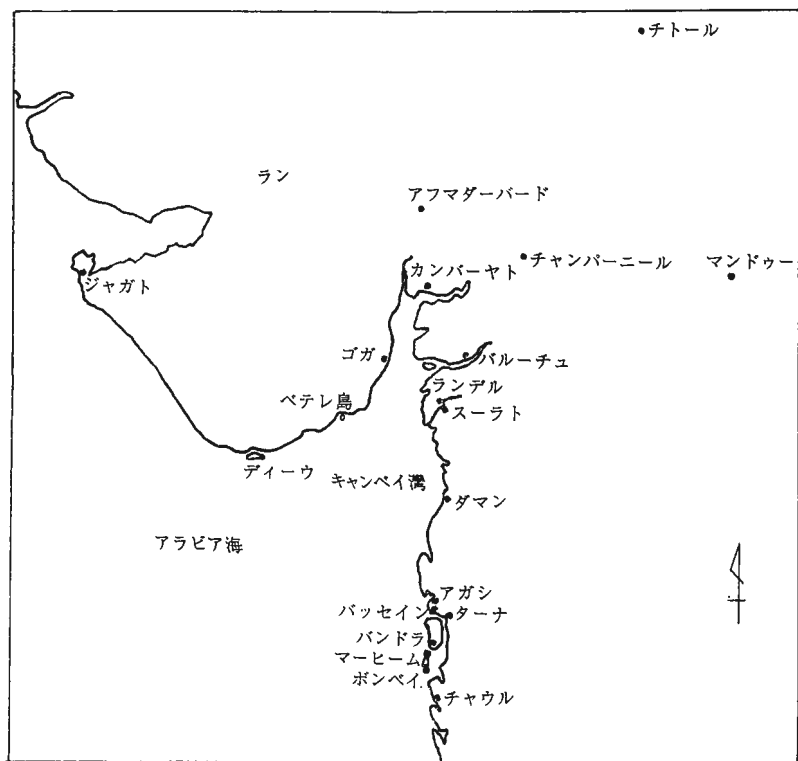
D 條約締結 パッセイン割讓

## 五 ディーウ要塞建設許可

## 結

一六世紀初頭、ローディー朝が末期をむかえて北インドの政治的混亂が増す頃、インド洋に面する西部インドのグジャラートにはアフマド＝シャーヒー朝（一三九六—一五七二）が存続していた。一方海上では、海上貿易の獨占を狙うポルトガルがグジャラートに新たな局面を現出した。既に一五〇八年にはチャウル Chauri 沖でマムルーク朝と港市ディーウ Diu との連合艦隊がポルトガル艦隊と衝突していた。

カーティヤーワール半島南端の島の東端にある港市ディーウの存在は一五世紀初頭には諸史料により知られるが、同地が海上貿易の據點として繁榮を始めるのは、一五世紀末に



グジャラート地方要圖

R. B. Smith, *The First Age of the Portuguese Embassies, Navigations and Peregrinations to the Ancient Kingdoms of Cambay and Bengal (1500-1521)*, Maryland, 1969. 所収の地圖をもとに作成。

マリクニヤーズ Malik Ayzaz<sup>(1)</sup>が同地をアフマドニシャーヒー朝スルターン、マフムード Mahmūd (位一四五九—一五一二)より與えられて後のことである。一六世紀初頭のディーウはこの繁榮を基礎に、名目上はアフマドニシャーヒー朝の支配下に屬しつつも、事實上は獨立した政權であった。ポルトガル側は海上貿易に占めるこの港市の重要性に鑑み、自ら目論む海上貿易統制の上で確保すべき據點の一つとした。據點の確保とは港市に商業據點としての商館を開設し、次いで軍事據點としての要塞を建設することである。

グジャラート側とポルトガル側との關係史を、諸研究の多くは、グジャラートの政治史の一齣としてきわめて粗雑なポルトガル海上帝國史の概説的研究と接ぎ木して把握するか、あるいはポルトガル側の經濟活動ないしミッション活動の一端として扱うかするものであった。ゆえに艦隊行動が起こされ據點建設をめぐる兩者の間に外交交渉が持たれるというきわめて政治的な問題が概説の水準を越えて研究の對象とされることはこれまでほとんどなかった。一六世紀前半におけるこの問題を巡って、ポルトガル語史料に加えて現地語史料をも十分に利用した研究は筆者の知る限り、Jニオバン氏・Mニニピアスン氏の諸研究に盡きる。前者はきわめて詳細かつ信頼できる研究であるが、第二代總督アフォンソニデニアルブケルケ Afonso de Albuquerque の執政期(一五〇九—一五一五)に限定したものである。後者もきわめて示唆に富む諸研究ではあるが、政治上の關係史の諸問題に關する限り、アフマドニシャーヒー朝スルターンたちが海上の問題に關心を寄せていなかったことがポルトガルの進出を可能にしたという自説を裏付けるためにきわめて恣意的な事實認定が行われていて、問題點が多い。<sup>(2)</sup>

以上のような研究史をふまえて本稿が目指すのは、第一にポルトガルの進出という、グジャラート史においてはすぐれて政治的な一連の事件の事實確定とその敘述である。ポルトガル語史料とペルシア語・アラビア語史料という立場の異なる二つの史料群を用いての史實の再構成は新たな歴史像を提供し得るであろう。第二には、これらの敘述を通じてグジャラート側・ポルトガル側の兩者を巡る諸關係の構圖・性質を明らかにすることである。そしてその中でポルトガルのグジ

ヤラート進出が何をもって可能となったかというピアスン氏の提起した問題にも筆者なりの見通しが示される豫定である。

一口に進出と言っても、その具體的な段階・程度は様々に規定し得る。本稿では一五三六年にポルトガル側が港市ディーウに要塞を構築して年來の目標を達成したことをひとつの劃期と見なす。アルブケルケ執政期に關してはオバン氏の研究があるので、本稿はさしあたりこれを踏まえた上で、それ以後一五三六年までの時期を時間軸に沿って敘述していくことにする。また關係史という問題の性質上、煩雜さを避けるために本稿はグジャラートの政治史としての敘述に基本的スタンスをおくことにする。すなわち本稿はポルトガル海上帝國史の研究ではない。<sup>(3)</sup>なお本稿においてグジャラート側とはアフマド・シャー・ヒー朝とその影響下の政治・軍事上のまとまりであり、ポルトガル側とはインド領總督の權力を中心とした政治・軍事上のまとまりを指す。<sup>(4)</sup>ただし前述の如く、ディーウはグジャラート側に屬するとはいへ、本稿の扱う時期の當初においてはその從屬が名目的なものであったことには留意しておかねばならない。

\*

第二代インド領總督アフォンソ・デ・アルブケルケはグジャラート政權下でのディーウとスーラト Suratt との港市同士の對立關係を利用しつつ數々の交渉を行い、一五一三年八月にはディーウへの商館開設を勝ち取っていた。一方アルブケルケは結果としてはディーウへの要塞建設を目指さず、武力によらないグジャラートの貿易統制を志向した。彼の執政期間中、グジャラートに對してはいかなる軍事行動も起こされない。オバン氏の言う「カンバーヤの平和」<sup>(5)</sup>とはアルブケルケのこのような一連の對グジャラート政策を指す。一五一五年のアルブケルケ解任は結果としてその政策の否認を意味した。そしてその後、ディーウへの要塞建設を目指しての外交交渉ないし武力行使を命じる本國からの指令を受けて、後任の總督たちが忠實にその事業に取り組む中で、グジャラート側とポルトガル側との關係は「カンバーヤの平和」<sup>(6)</sup>とは異なる様相を呈するに至る。これを示す最初の事件が一五二〇—一年の一連の事件であった。

# 一 ディオゴ・ロペス・デ・セケイラの遣使

一五二〇年八月、ディーウを訪れた總督ディオゴ・ロペス・デ・セケイラ Diogo Lopes de Sequeira (任一五一八一—二二)は、要塞建設に關してのマリク・アヤーズとの交渉で成果を上げられず、ゴアに歸還した。翌一五二一年二月、總督は同じく要塞建設許可のための交渉を行うために再び艦隊を率いてディーウに到來した。しかしこの時マリク・アヤーズがアフマド・シャーヒー朝スルターン、ムザッファル Muzaffar (位一五二二—二六)の發動した遠征に參軍して不在で、その息子が殘留して居るのみであつたため、交渉そのものが成り立たなかつた。このため總督はディーウの宗主たるムザッファルのもとに要塞建設許可を求める使者を送つたが、この使者も目的を果たし得なかつた。ディーウに殘留して遣使の結果を待つていたポルトガル側の部隊は、外交交渉失敗の結果を受けて、ディーウに攻撃を掛けたが、敗れて撤退した (Barros: III, iv, 7—9, 109a—116a; Cast.: V, xlv—lii, 76—85; Correia: III, 603—22)。

以上の如く略述できる一五二〇—二一年の出來事を巡る諸關係の構圖を明らかにすることはこの時點においてポルトガルのディーウ要塞建設を可能とするものが何であつたかを教えるはずである。以下この構圖を解明するに當たっては、總督からスルターンへの遣使を巡る情報が出發點となると思われる。

總督から派遣された使者はアフマド・シャーヒー朝の首都チャンパーニール Champañir に居たスルターン・ムザッファルのもとに到着した。Barros は、當時ムザッファルのもとにいたマリク・アヤーズがこれに對して取つた行動を傳える。

ルイ・フェルナンデス「使者」が、王「スルターン・ムザッファル」の居るチャンパネル市に到着したとき、すでにメリケ・アズ「マリク・アヤーズ」は彼の息子を通じて、ディオゴ・ロペス「總督」について起こつてゐたことについて、そして「總督」かの目的「要塞建設許可を求めること」のためにこの使者を王のもとに送つたことについての傳言を

得ていた。それからメリケニアズは、彼が王に會見する前に、與えることになっている返事について彼「王」とすでに取り決めていた。そのため彼ルイフェルナンデスが、彼メリケニアズに對してよろしい感情を抱いていない宮廷の貴人たちの誰かと氣脈を通じることのできるような、そして彼らを通じて彼ルイフェルナンデスが、ディオゴロペスの傳えてきた望みへと王を動かすことのできるような餘地を「マリクニアーズは」全く與えなかった<sup>(7)</sup>。  
(Barros: III, vi, 6, 163a).

この記事によつてポルトガル側の遣使がムザッファルに對するマリクニアーズの働きかけによつて挫折を餘儀なくされたことが明らかとなる。しかし諸史料の記事からはムザッファルがディーウに對していかなる關心をどの程度抱いていたかは明らかにできない。いずれにせよここで重要なのはマリクニアーズとムザッファルとの關係ではない。より注目されねばならないのは「マリクニアーズに對してよろしい感情を抱いていない宮廷の貴人たち」の存在である。

先述のムザッファルの遠征においてマリクニアーズとともに最前線の指揮を取った者がキワームアルムルクQinm al-Mulkなる人物であることが傳えられている。彼は先代スルターンマフムード以來の舊臣であり、ムザッファルの即位を推進し、ムザッファル政權の實權を掌握して有力なアミールの一人となつていた(MS: 173, 224)<sup>(8)</sup>。にもかかわらずこの遠征の戦鬪においてはマリクニアーズに多くの戦力が任されたのであり、このことからキワームアルムルクはマリクニアーズに強い敵意を抱いていたという(MS: 200-2)。ディーウに據るマリクニアーズはグジャラト政權からは半ば獨立しており、諸史料から判斷する限り、彼が同政權の表舞臺に登場するのがこれが最初であつたから、羽振りのよいいわば新参者に對する舊臣としての警戒感・不快感がキワームアルムルクに生じるのは當然と見てよい。

だがそれだけではない。以下の二點を手がかりにキワームアルムルクの持つ政治的背景を検討するとひとつの構造的な對立の軸が明らかとなる。先代スルターンマフムード治下、南方のバフマニー朝のある廷臣が港市ダーボルDabholを據點に反亂、これによつてグジャラートの海上交通は寸斷され、大きな經濟的打撃を被つた。これに對してスルターン

命によつて海陸から兵士を率いて鎮壓に向かったのがこのキワーム＝アルムルクであつた (MS:145—6; T.A.iii, 56—63)<sup>(9)</sup>。以上が第一の點である。第二點は、キワーム＝アルムルクの息子たちが後のスルターン＝バハードゥル Bahadur (位一五二六—二七) 治下でポルトガル側に對する數々の海戦を指揮していることである。海上交通の安全確保のためにスルターンがある者をして兵を動員させ得るということは、その人物もそれを巡つて何等かの利害を伴つており、その依據する基盤の相當部分が海に關わる何らかのものであつたと見る事が可能である。そしてその息子たちがグジャラートの主力艦隊の主たる指揮官だつたこともこれを明確に裏付けるものであらう。

さらに海に關わるキワーム＝アルムルクの利害は、彼とマリク＝ゴープー Malik Gopi なる人物との間にあつた密接な政治的關係を通じてより明確にされる<sup>(11)</sup>。キワーム＝アルムルクはマリク＝ゴープーとともにムザッファル即位を推進し、この兩名によつてムザッファル政權下での實權が掌握されていた (MS:224)。また後にスルターンの親族に對する不祥事の責任を負つて處刑されたマリク＝ゴープーの辯護を行つたのがキワーム＝アルムルクであつた (MS:226)。さらに政治的關係に留まらず、兩者の間には「異教徒」としての繋がりも存在していた (MS:224)。

フリク＝ゴープー<sup>(12)</sup>はブルーチュ Bhadrach ないしスーラトといつたキャンベイ灣東岸の諸港市を根據地として海上貿易に携わる人物であつた。在世中の彼がディーウに據るマリク＝アヤーズと海上貿易の利害を巡つて對立していたことを Barros は傳へる。

このディオ『ディーウ』市に人々が住みはじめると、そこに航海するほうがより安全なので、同市は他の都市が得ていた利益を一人占めするようになったのである。このためメリケ・アズ『マリク＝アヤーズ』は非常に嫉まれるようになり、王の前で手強い競争相手を持つこととなつた。とくにカンバイア灣の内部にあるバロチュ『ブルーチュ』市の領主メリケ・グピ『マリク＝ゴープー』がそれで、これは彼がディオのために取引をすべて失つてしまつたからである<sup>(13)</sup>。



以上に示されたキワーム・アルムルクの海上の諸問題に關わる利害、キワーム・アルムルクとマリク・ゴビーとの政治的親近性、マリク・ゴビーの海上貿易活動の三點はキワーム・アルムルクとマリク・ゴビーとが海上貿易に關して政治的利害を共有し得たことを教えるものと考えられる。そしてここから更にマリク・ゴビーとマリク・アヤーズとの海上貿易を巡る利害對立を踏まえるとき、キワーム・アルムルクがマリク・アヤーズに對して抱いていた敵意は、宮廷における新興勢力に對する疎ましさだけに發するものではなかったことが判然とする。すなわちその敵意は、ディーウとキヤンベイ灣東岸諸港市との海上貿易を巡る利害對立という構造問題の現われでもあったのである。後述する如く、一五二六年にアフマド・シャーヒー朝の進軍によってマリク・アヤーズの一族がディーウから排除された後に、ディーウ統治をスルターンによって委されたのがこのキワーム・アルムルクであったことはこの結論を裏付ける (MS. 266)。

ポルトガル側のスルターンへの遣使がグジャラート側のこのような事情を踏まえたものであったことは明らかである。<sup>(14)</sup> マリク・アヤーズは、ディーウのポルトガル商館はともかく要塞建設は望まない。であればディーウ要塞建設を可能にするのは、形式上はスルターンの裁可であるが、實質上はそれを望む、ディーウへの對抗勢力のスルターンに對する影響力であった。ポルトガル側の使者がスルターンのもとに向かいながら、マリク・アヤーズへの反對勢力との接觸を圖ることを示唆する Barros の記事の背後にあるのはこうした事情であった。

以上の考察から一五二一年の一連の交渉における諸關係の構圖の一端が明らかになった。そしてその構圖はディーウへのポルトガル側の進出が、グジャラート政權内部での政治勢力の經濟利權を巡る對立の結果として引き出され兼ねない局面にあったということを教える。ディーウがマリク・アヤーズのような強力な地方支配者によって半ば獨立して統治されているときには、ポルトガル側がディーウに進出を試みる場合、グジャラート政權内部の何等かの對立關係を利用せざるを得ない。スルターン麾下の有力者の力關係を利用するという交渉の形はアルブルケ執政期のそれと同様である。一連の事件でディーウ要塞建設という目標のためにポルトガル側が用いたのは海軍力ではなかったのである。

さて一五二一年のこの交渉が兩者の武力衝突によって幕を引かれたことの意味はきわめて大きい。この交渉の行われる一五二一年に入って、ポルトガル側とディーウとの間の雰囲気はきわめて險惡なものであった。ディーウへの動員を目指してコーチンでひそかに建造中の大規模なポルトガル艦隊についての報が事前にもたらされたディーウでは、二月に總督麾下の艦隊が到来したときには強力な防備態勢が敷かれていた。公式の事前連絡のないポルトガル艦隊の到来に對してディーウ側は態度を硬化させ、ポルトガル側の艦隊行動をディーウの占領を狙ったものではないかと警戒し、アルブケルケの時代に結ばれていた和平にもとるものであるとしてこれを非難している (Barros: III, iv, 9, 113a—b; Cast.: V, xlvii—xlviii, 79—80)。その後前述の如く失敗に終わったスルターンへの遣使の結果を受けて、ディーウに滞留していたポルトガル部隊はディーウに對する武力行使に出る。これに敗北したポルトガル側が撤退し、ディーウ商館の商務員もこれに伴って引き上げるに至って兩者の對立は決定的となった (Barros: III, vi, 6, 168a—169a; Cast.: V, liii, 85—6; Correia: III, 637—643)。これ以後、兩者の間には武力抗争が相次ぐのである。

一五二一年、ディーウでの事業と並行して、ポルトガル側はグジャラートの南方に位置するニザーム・アルムルク Nizām al-Mulk 政權と交渉を行い、その領内の港市チャウルに要塞を構築する許可を得ていた (Barros: III, vi, 7—8, 170b—173b; Cast.: V, lii, 84; Correia: II, 659—660)。同地はディーウ攻略の上で重要な戦略地點だったからである (Cast.: V, lxxii, 115—6)。この動きに對してディーウ艦隊が一五二二年末から一五二三年初にかけてチャウルのポルトガル側據點を攻撃するが、これを撃破するには至らなかった (Barros: III, vi, 8—10, 171a—177b; Cast.: V, lxxiii—lxxiv, 117—121; Correia: II, 661—670)。また一五二四年にはディーウ側から和平を打診する使者が就任したばかりの總督エンリケ・デ・メネーゼス Henrique de Meneses (任一五二四—一五六) のもとに派遣される。この時にはポルトガル側は態度を保留するが、「ルーム人」<sup>(16)</sup>の船の改修のために紅海方面に木材を運んでいたディーウからの船二隻が発見されるに及んで、ポルトガル側の態度は一氣に硬化する<sup>(17)</sup>。ディーウからの和平の打診は默殺され、むしろこの船の拿捕を目指してポルトガル艦隊が展開するに至って緊張が

増した (Barros: II, x, 8, 262a—b; Cast.: VI, lxxix, 273; Correia: II, 859—860)°。一五二一年の衝突以後、兩者の對立は加速する局面にあった。

## 二 スルターンニバハードウルのディーウ掌握

前章において明らかな如く、一五二一年以來の對立の諸局面は基本的にはディーウとポルトガル側との間で生じていた。しかし名目的とはいえディーウの宗主たるアフマドニシャーヒー朝の姿勢によっては、この對立の構圖はアフマドニシャーヒー朝對ポルトガル側というものに轉化し得た。だが一方ではディーウが必ずしもアフマドニシャーヒー朝の影響下にあり續けるとも限らなかった。

一五二六年、アフマドニシャーヒー朝政權においてスルターンニバハードウルが即位した。彼によって取り組まれた最初の事業がディーウ遠征である。この事件を通じて、一五二一年以來のディーウ對ポルトガル側という事實上の關係の構圖は決定的に變化する。ところでこの事件においてもグジャラート側には複数の政治的關係が錯綜していた。まず一五二六年の事件の背景となるこれらの諸關係を整理する必要があるが、そのためにはまずスルターンニバハードウルの即位に至る経過を追跡しなければならない。そしてその上で事件の敘述に入りたい。

## A 卽 位

スルターンニムザッファルの治世末期になると、後繼の地位を巡って王子たちの間で抗争が始まる。中でも最も有力だったのは實母ビービーニラーニー Bibi Rani が七千人の從者 (nawak) を擁して政權の諸方面に絶大な影響力を誇っていたことを背景にしていたスカンダル Sikandar であった。既にムザッファル在位中にビービーニラーニーのムザッファルへの働きかけによってスカンダルは後繼指名を受けていた (MS: 232—4)。だがヒジュラ曆九三〇 (一五三一—四) 年に

ビービー＝ラーニーが死去し、スカンダルを推す一派が大きな柱を失うと、スカンダルの異母兄弟バハードウル・ラティーフ Latif の兩名もが王位を目指し、確執を繰り廣げたのである。こうした中でバハードウルはスカンダル一派の壓力を受けて一五二五年には、ローディー朝のもとに亡命を餘儀なくされていた (MS:204—5)。

一五二六年三月一日、ムザッファルが死去すると、事前の後繼指名が奏效したのか、さしたる混亂もなくスカンダルが即位した。ところが彼は王子時代からの自らの黨派のみを優遇し、これにムザッファルの時代からのアミールら (ムザッファリー Muzaffari) が危機感を強めた (MS:239)。その黨派とはビービー＝ラーニーの残した nawkar を中心とする勢力に他ならない。しかしスカンダルは即位後わずか二箇月半で、ビービー＝ラーニーの奴隸 (ghulam) でありかつ自らの師傳 (aanga) として仕えていたイマード＝アルムルク Imad al-Mulk によって暗殺されてしまった。期待していた待遇をイマード＝アルムルクがスカンダルから與えられなかった遺恨に加えて、一部のムザッファリーが蜂起をイマード＝アルムルクに働きかけたことがその原因とされる。スカンダル政權は豫期せざる身内の造反によってあっけなく倒れたわけである。イマード＝アルムルクはスカンダルの異母兄弟の幼兒ナシール＝ハーン Nasir Khan を登位させた (MS:240—46, 250; TA:iii, 197)。ムザッファリー＝アミールとは政權内のいわば守舊派である。スカンダルが暗殺されても、新たに即位したスルターンがスカンダルを支持していたあの一派の一員の影響下に置かれていたのでは問題は何等解決されない。事實、一旦はナシール＝ハーンに歸順したアミールたちもすぐに離反してしまふ (MS:250—51)。南方邊境に居るラティーフ＝ハーンの勢力は弱い。ここにおいてムザッファリーの大勢はかつてスカンダルとスルターン位を競ったバハードウルの支持に傾くことになる。

既にバハードウルはムザッファル死去の報を得ると直ちにグジャラートへの歸路を取っていた。そしてその途上においてスカンダル暗殺を知る。スカンダル暗殺の罪人を討つという大義をも得たバハードウルはアミールたちが相次いで歸順する中、一五二六年七月六日にはアフマダーバード Ahmadabad に入城、イマード＝アルムルクを殺害して同年八月

二二日にはチャンパーニールで即位した。そして同年中には、一部のムザッファリーの支援するラティーフ・ハーンを敗死させ、ナスィール・ハーンを含む他の兄弟たちをも一人を除いてすべて殺害することで完全に實權を掌握した (MS: 251-265)。

以上のことからバハードゥル政權は守舊派であるムザッファリー・アミールたちがビービー・ラーニの残した勢力を排除しようとする試みの中で成立し、バハードゥル自身はこれらムザッファリーの支持を背景に即位したことが確認できる。そしてこのことが治世最初の事業であるディーウ掌握と關連することになるのである。

## B ディーウ掌握

以下では事件の分析に先立ち、諸史料から一連の流れを確定しておく必要がある。以下、やや長くなるが事件の流れを敘述する。

バハードゥルが自らの兄弟たちとそれに與する勢力を掃討しつつある頃、ディーウを支配していたのは既にヒジュラ暦九二八 (一五二二) 年に死去していたマリク・イスハークの後を襲っていたマリク・イスハーク Malik Isḥāq であつた。バハードゥルとの對立を餘儀なくされた (後述) 彼はポルトガル側との提携の道を探る。一五二六年九月末頃「重要な案件について話をしたい」とのマリク・イスハークの打診に應えて、ポルトガル側の使者がディーウに派遣されてきた。<sup>(18)</sup> ポルトガル側との交渉においては提携の條件としてディーウ側の要塞をポルトガル側に引き渡すことがマリク・イスハークの側から提示された。さらにマリク・イスハークは自らがバハードゥルの攻勢に備えるための據點を造るためにディーウにある火砲・軍需品を携えてジャガト Jagat に移らなければならないとし、それゆえディーウ税關の稅收の半額をポルトガル側が自らに送るべきことを提示した (Cast. VII, vii, 15; Couto: IV, i, 7, 51-52)。<sup>(19)</sup> しかしマリク・イスハーク配下としてディーウ艦隊の提督であつたアーガー・マフムード Aghā Mahmūd は婉曲に批判的な進言をマリク・イスハーク

クに行つて、ポルトガル側との妥結をためらわせる一方、ポルトガル側の使者には、ポルトガル艦隊の到来およびディーウ要塞引渡しに關わる交渉を知つて生じたディーウ住民の混亂を理由に交渉の延期を求め、さらに一旦撤退することを求めた。ポルトガル側はこれをマリク・イスハークがディーウ要塞引渡し提案を後悔したものと取り、交渉の成り行きを疑問視した使者自身が自らの判断でディーウを去つたことで、交渉は頓挫してしまつた (Cast.: VII, vii-viii, 15-18)。この時アーガー・マフムードはマリク・イスハークの意向とは別の路線を密かに構想していたのである。

アガマフムト Hagamamut 「アーガー・マフムード」は、ディーウをポルトガル人が掌握しないようにするというのとは異なる目的のために彼「總督」に同市を與えなかつた。すなわち彼はマリク・イスハークと別れて、カンバーヤ王「バハードゥル」と和解するために「バハードゥルに」同市を引き渡すことを決心していたのである (Cast.: VII, vii, 16)。

ここから彼の構想とは、ポルトガル側ではなくバハードゥルと結ぶことによつてディーウの保全を圖り、かつ同市に對するバハードゥルの敵意をかわそうというものであることが確認される。マリク・イスハークとバハードゥルとの間の敵意を見た彼は、マリク・イスハークを排除して、バハードゥルに對する忠誠を表明することで、この事態を切り抜けることができると思つたのであろう。そしてこの構想はマリク・イスハークの兄弟マリク・イルヤース Malik Iyas・マリク・トガン Malik Tughan 兩名の同調するところでもあつた。アーガー・マフムードはマリク・イスハークがジャガト島への移動を始めると (Cast.: VII, xiii, 26)、構想の實現に出た。

ある日マリク・イスハークがディーウから二リーグの彼の座所の一つに居たとき、【アーガー・マフムードは】カンバーヤ王のために同市とともに蜂起した。人々はこれを歓迎した。というのは彼らにとつてマリク・イスハークとともに同市から出て行くことはきわめて重荷だつたからである。同市を反亂させるとアガマフムトは直ちにそれをカンバーヤ王に知らせた (Cast.: VII, xiii, 27)。

そして

【アーガー・マフムード側は】編成した艦隊に集まった兵士たちに多くの糧食を與えた。騒亂の起こったその夜に彼らは火炮を持ちだし、もとあった同じ場所に設置した。そして朝にはすぐに市の諸門を閉ざし、メリケ・サカ Melique Sagua 【マリク・イスハーク】の手の者が誰一人、市中に入らないようにそこに守備隊を置いた (Chronica:59)。

アーガー・マフムードとマリク・イスハークの兄弟を含む一派のクーデターが住民の支持を背景に決行されたわけである。そして彼らはポルトガル側の使者が交渉の合間でディーウに不在のすぎをついて、バハードゥルの介入を誘ったのである。マリク・イスハークはこれに對して先の提案を根據にポルトガル側に支援を求めるが、ポルトガル側は既に時機を失した出兵に動こうとはしなかった (Cast:VII, xiii, 27)。(20) 追いつめられたマリク・イスハークは自ら、ディーウに向かつて進撃を開始した (Chronica:59; MS:265—67; ZW:i, 150)。

これに對してマリク・イルヤースの上申を受けたバハードゥルは陸路でディーウに迫った。この報を受けたマリク・イスハークは北方のラン Ran の濕地帯へ逃上<sup>(21)</sup>、その後再びディーウに戻ることはない。バハードゥルはディーウに入ってマリク・トガンの歸順を受けた。ところがディーウに入った後のバハードゥルの對應はアーガー・マフムードやマリク・トガンの期待を完全に裏切るものであった。兩名の地位の保全どころか、バハードゥルはその殺害さえ命じたのである。だがこれはバハードゥルに隨行していた者の進言により中止されて、兩名は首都チャンパーニールに送られ、幽閉された (Chronica:60)。そして兩名に替えてディーウの統治職にはキワーム・アルムルクがバハードゥルによって任じられた (MS:266)。

以上が事件のあらましである。さて最終的にバハードゥルがディーウを掌握して終わったこの事件をめぐる諸關係の構圖を明らかにするためには、即位後間もないバハードゥルがマリク・イスハークに投げかけた問題が手がかりになる。

【バハードゥルは】ディーウに居たメリケ・サカ【マリク・イスハーク】に挨拶をするために宮廷に參上するようにすぐに命じた。しかし王【バハードゥル】が以前から憎しみを抱いていたので【マリク・イスハークは】參上しようとは

しなかった。なぜなら王がグジャラートから逃げて出發したとき、彼に資金を求めたが、彼は「自分はあなたの<sup>(22)</sup>espo.であり、自分の持っているものはあなたの父王「ムザッファル」のものであるのだからその許可がなくてはそのうちのいくらかも與えることはできない」と言つて與えなかったからである(Chronica: 58)。

この記事はディーウに據るマリク・イスハークが、アフマド・シャーヒー朝のスルターン位を巡る前述の抗争においてバハードゥルではなくスカンダルに與する立場を取つていたことを暗示する情報であると考へ得る。<sup>(23)</sup>Cast.の以下の情報によつてこの點は確定できる。

ソルタン・バドゥル「スルターン・バハードゥル」はカンバーヤを平定した王となると、自分に齒向かつて兄弟の側に附き従つた王國內の幾人かの領主たちに報復することを望みはじめた。そうした領主たちの中の一人がディーウのカピタンだつたメリケ・アズの息子メリケ・サカであつた(Cast.: VII, vi, 14)。

前節においてバハードゥルの即位が、ムザッファリー・アミールがスカンダル支持派を排除する過程において生じたことが述べられたが、ディーウに對するバハードゥルの上の如き外交的壓力もまたその延長にあることがここで明らかに<sup>(24)</sup>なるであらう。

さらにディーウ掌握後のバハードゥルが、ディーウを支配してきた一族を排除してキワーム・アルムルクをその統治職に任命したことも注目されねばならない。バハードゥルの支持層たるムザッファリー・アミールの一有力者と目される彼の起用は第一には上の點と符合する。さらに第一章で指摘されたようなキワーム・アルムルクとディーウとの對立關係を踏まえるとき、年來の對立者をこの機會に排除しようとしたキワーム・アルムルクの意圖とその實現のためのバハードゥルに對する働きかけがあつたこともまた想像に難くない。

しかしながらその治世におけるバハードゥルの強力なイニシアチブを見ると、この事件をキワーム・アルムルクなしムザッファリー・アミールたちの主導のみに歸することは正しくない。この事件以前、ディーウは名目上はアフマド・



シャーヒー朝に服屬しながらも事實上は獨立した政權であつた。バハードゥルは自らの外交壓力によって生じたディーウの内訌に乗じて、自らの實力行使によつてその支配者を排除、統治官を送り込むことでディーウの支配に介入してこれを直接の手中に収めることに成功したのである。後述する如く、バハードゥルが一五三五年までの間にキワーム・アルムルクを含むディーウの統治者を自らの意向で幾度も交替させていることはディーウに對して彼が振るい得た指導力を裏付けるものであろう。キワーム・アルムルクのディーウ任命は、マリク・アヤーズの一族に對して、年來のその對抗者をあてることとこれを一掃しようとしたバハードゥルの意圖が明確に現われているものとも見なければならぬ。

以上の如く、史上初めてディーウを掌握したアフマド・シャーヒー朝スルターンとしてこの港市に對するバハードゥルの關心の深さは明らかにする。一五二六年のこの事件の後、一五二八年までのきわめて短期間の内にディーウを三度も訪れていること、同じ頃にバルーチュに城塞を構築させ、スーラトを視察していることから海岸諸地方の經營に彼が強い關心を寄せていることが分かる(MS:286—8)。このようにディーウに對して強い關心を抱くバハードゥルにとってポルトガル側は警戒すべき敵對者として認識されたものと考えられる。そして自らがディーウの支配に介入しようとした時、ポルトガル側とディーウの支配者とが結び附こうとしていたことはバハードゥルの警戒心をさらに煽つたはずである。もはや諸關係の構圖はディーウ對ポルトガル側というものではなかつた。

したがつてこれ以後のグジャラート側とポルトガル側とのディーウを巡る諸關係は、一般に想定されるような單線的な「ポルトガルの進出」や「グジャラートの抵抗ないし服從」などではなく兩者の「ディーウをめぐる爭奪ゲーム」なのである。一五二六年末の一連のこの事件はこの爭奪ゲームの第一幕でグジャラート政權側が勝利を収めたものだということになる。グジャラート側の史料にバハードゥルの治世における海岸部でのグジャラート側の軍事行動やそれに準ずるものに關する記事が多くなるのもこうした事情による。ディーウに對して明確な志向を持つバハードゥルという強力なスルターンのもとでは、麾下の有力者のパワーバランスに乗じて交渉を有利に進めていくというアルブケルケ以來の外交パター

ンはもはや機能しない枠組みが生じていた。

### 三 抗争の諸局面

#### A チャウル攻撃

一五二八年八月末から九月にかけて、チャウルを據點にしたポルトガル艦隊がディーウ沖で、キワーム＝アルムルクの息子 Alixa 麾下のディーウ艦隊と交戦、相當の被害を受けて撤退した (Cast.: VII, lxxix-lxx, 119—121; Couto: IV, iv, 9, 304—12)。この事件により、バハードゥルはポルトガル艦隊の據點となっているチャウルをあらためて問題視した。同地は既に一五二二年にニザーム＝アルムルク政權によってポルトガル側の要塞建設が許可されていた所である (Cast.: V, lii, 84; V, lxxxii, 130—3)。折しも同政權との間で抗争を展開する南方のファールキー朝 Faruqi 政權・イマード＝アルムルク 'Imad al-Mulk 政權から介入要請がバハードゥルのもとに來ていた。こうしてチャウル奪取をも一つの目的として二度にわたる對ニザーム＝アルムルク遠征が發動される。<sup>(25)</sup> 一五二八年八月末に起こされた第一次遠征に並行して、海上ではディーウから出撃した Alixa 麾下の六〇隻餘の艦隊がチャウルに向かったが、一五二九年二月六日のボンベイ沖の海戦で壊滅的な敗北をポルトガル艦隊に喫してしまった (Cast.: VII, xcii-xcv, 164—9; Correia: III, 289—295)。この大敗の影響は甚大であつた。<sup>(26)</sup>

ディーウ艦隊の壊滅がおそらく影響したと思われるが、一五二九年九月からの第二次遠征に伴うチャウルへの軍事行動は陸路からのもののみとなつた。この攻撃によってグジャラート側の部隊は一旦はチャウルのポルトガル側司令官を逃亡させるが、程無くポルトガル側の援兵が到來して撤退を餘儀なくされた (Cast.: VIII, x, 208—210; Couto: IV, vi, 9, 94—5; MS: 272)。こうして對ニザーム＝アルムルク遠征と連動したチャウルへの攻勢は、同地の掌握という目的を達し得ず、事

實上失敗に終わった。

翌一五三〇年九月、バハドウルは海路、ディーウに向かう。その際、先の海戦における息子 Alixa の大敗の責任をとらされて、ディーウの統治者キワーム・アルムルクが解任され、その後任にマリク・ヒトガンがアーガー・マフムードとともに復活した (Chronica: 62; Correia: III, 343—47; MS: 274)。

## B 一五三一年ディーウ攻防戦

一五三一年一月初、總督ヌーノ・ダ・クニーニャ Nuno da Cunha (任一五二九—三八) はディーウ掌握を目指して一五〇隻を超える大艦隊を編成し、ゴアを出發した。總督麾下の艦隊はチャウル沖の海戦でアーガー・マフムード麾下のディーウ艦隊と交戦、アーガー・マフムードを戦死させた。更に同艦隊はバッセイン Bassein・ダマン Daman・ゼテレ Betele 島を経て、二月一日にディーウ沖に到來した (Cast: VIII, xxviii—xxxi, 240—249; Correia: III, 390—412; Couto: IV, vii, 2—3, 123—38)。このようにポルトガル艦隊がディーウ到來までに各地で時間を費やしたことは結果的には戦略上の失敗となった。

オスマン朝に反亂してイエメンから艦隊を引き連れて亡命してきたムスタファ・アー・ルーミー Mustafa Rumi が同年一月末にディーウに到着し、マリク・ヒトガンの麾下に入っていたのである。彼はガレオン二隻に「ルーム人」六百・アラブ人千三百を乗り組ませ、多數の火炮をはじめ多くの武器を携えていた (Cast: VIII, xxxi, 247—48; Chronica: 69; Couto: IV, vii, 4, 138—141)。<sup>(27)</sup> マリク・ヒトガンは、ムスタファ・アー・ルーミーを加えて、七三隻の艦隊をディーウの港周邊に展開してポルトガル艦隊を砲撃し、多大な損害を与えた末、撤退に追い込んだ (Cast: VIII, xxxii, 249—52; Correia: III, 413—17)。<sup>(28)</sup> 通説ではその武力の壓倒的優位を言われているポルトガル艦隊の完全な敗北である。

## C ポルトガル側の戦略轉換

ディーウ沖で敗戦を喫したポルトガル側はベテレ島に撤退し、今後の戦略について軍議を開く。ここではディーウ占領の取り組みの中止が決定され、グジャラートの海岸地方への軍事行動を重視するように戦略が轉換された。それはポルトガル艦隊を同海域に残留させ、諸港市を破壊・掠奪し、哨戒活動を行うことによって、ディーウへの物資の供給を断とうというものであった。さらにバハードゥルの命を受けてフリクットガンが要塞を建設させていたバッセインの奪取をも目指すこととされた(Cast: VIII, xxxiv, 254)。同地がディーウへの戦略上の重要地點であるばかりでなく、同地に「ルーム人」が據點を置くことを恐れたためである(Cast: VIII, li, 281)。

この決定を受けて、同一五三一年の雨期までにポルトガル艦隊の一部がゴガ Gogha・スーラト・ランデル Rander で破壊・掠奪を行った。雨期明けの同年一〇月にはターナ Thana を襲撃してこれを占領、さらにフリクットガンの掌握下にあって多くの「ルーム人」が駐屯していたバンドラ Bandra を攻撃した。この後にはポルトガル側は翌一五三二年の雨期の始まりまで艦隊を三―四隻の小部隊に分けて各地に派遣し、掠奪を行わせた。雨期明けの同一五三二年一〇月にはポルトガル側による破壊活動はカーティヤーワール半島にも及び、ディーウの西方に點在する諸港市に攻撃が行われた。さらに翌一五三三年初頭にはバッセイン・ダマンなどを攻撃した(Cast: VIII, xxxv, 255—56; VIII, lxxv-lxxv, 271—74; VIII, lii, 281—82; VIII, lix-lxii, 295—304; Correia: III, 417—18)。バッセインを占領するという戦略目標は果たせなかったが、こうした艦隊行動は少なからぬ經濟上の壓迫をディーウに與えたという。<sup>(29)</sup>

このような展開の中で一五三三年三―四月頃、バハードゥルはポルトガル側に對して和平の打診を行った。その際、ポルトガル側はこの打診をバハードゥルが攻勢に屈した結果と受取り、宿願であるディーウ占領に向けての大きな一步と認識して、一方的に期待を高めるのである。その後の展開が現象としてはバハードゥルの譲歩へ向けて進むために混亂を生

じやすいのだが、實際は、一五三三年三月四月頃のバハードゥルがポルトガル側の攻撃に一方的に屈したということではなかった。したがってバハードゥルにとっては和平の打診とはいえ、ポルトガル側の要求をのむものとは必ずしもならない。一五三四年一月のバッセイン割讓をめぐる交渉は兩者のこうした微妙なずれの間を進んでいくことになる。このことを明らかにするために我々は當時、バハードゥルの置かれていた外交關係の枠組み全體の中で問題を捉えていかなければならない。その枠組みの極の一つは無論ポルトガル側であり、そしてもう一つが北インドに新たに成立していたムガル朝である。

#### 四 バッセイン割讓へ

##### A 交渉の打診

一五二六年に成立したムガル朝とアフマドゥシャーヒー朝との關係は總じて良好ではなく、バハードゥル治下ではアフマドゥシャーヒー朝の一…對外擴張と二…ムガル朝への造反分子に對する影響力との二點によって緊張が生じていくことになる。

第一の點については、一五三二年初頭からのマールワ地方への遠征を擧げることができた。この遠征でマンドゥー・Mandū に據る政權を瓦解させ、バハードゥルはさらに進んでヒンドウスターン平原東方地域を窺うことのできるチャンデーリー Chanderi などの交通路上の重要地點を一五三二年初までに掌握するに至る (MS: 275—8, 281—9)。

第二の點は第一の點の結果でもある。ヒンドウスターン平原東方地域はローディー家の殘黨をはじめ、ムガル朝に好意的でないアフガン諸勢力が跋扈していた地域であった。一五三二年にラクナウ Lakhnaw の戦で敗れたこれらアフガーンの多くはバハードゥルのもとに亡命していたのである。のみならず彼らのうちローディー家の者たちが占領地たるチ

ヤンデーリーにバハードゥルによって配置された (MS: 288—89)。さらにバハードゥルはビハールに留まっていたアフガーンのシール＝ハーン Shīr Khān (後のスール朝の建設者) には資金面での支援を與え、自分への歸順を求めている (AN: i, 148)。これらの事例は反ムガル朝分子に對するアフマド＝シャーヒー朝の影響力をよく示すものと言える。

一五三一年初から翌年の雨期までのマールワ遠征の時期は、海岸地域に對するポルトガル艦隊の戦略的な掠奪・破壊活動が展開された時期と重なる。しかし一五三二年の雨期に自らのもとを訪れたマリク＝ヒトガンの情勢報告にも拘らず (Chronica: 69, 73)、『バハードゥル自身はマールワ遠征を優先し續けた。一五三二年の雨期明けにはマリク＝ヒトガンの報告を受けてバハードゥルはポルトガル艦隊に對抗するためにディーウに向かったけれども、ディーウを攻撃したわけでもないこの艦隊とはまみえることさえなく、バハードゥルは内陸方面の事業に戻っていた (Chronica: 73; MS: 290)』

さて上二點によるアフマド＝シャーヒー朝とムガル朝との緊張の高まりが具體的な形をとって現われるのが一五三二年一月からのバハードゥルによる第一次チトール Chitaur 攻圍をめぐる動きであった。前述の通りディーウから歸還したバハードゥルは一五三二年一月一日にチトール攻圍を開始し、一五三三年三月二十四日にこれを掌握した。そしてこのチトール攻圍を警戒していたムガル朝バードシャ、フマーユーン Humayun に對してバハードゥルから友好を確認する使者が派遣された (AN: i, 124; Chronica: 75; MS: 301; ZW: i, 227<sup>(30)</sup>)。東方地域においては積極的にその影響力の擴大につとめてきたバハードゥルも、ムガル朝との對決までは當初は考えていなかったことがこの行動より明らかにされる。この使者はきわめて友好的に迎えられ、フマーユーンのもとからは答禮使が派遣されて、兩者の間に和平が確認された。そしてこの交渉によってバハードゥルはマールワ地方への支配權をフマーユーンに認めさせることにも成功した。これがこの後バハードゥルとフマーユーンとの間に取り交わされる三回の交渉のうち、第一回目の交渉であった。

一方、既にチトール掌握に前後する頃、バハードゥルはポルトガル總督に對して和平締結を打診する使者を送っていた (Cast.: VIII, lxv, 306; Chronica: 75)。その時期がムガル朝との和平が確定する以前であるから、後方との關係の安定をバハ

ードゥルが目指していたことは容易に推論できる。ゆえにこれをバハードゥルの態度の「軟化」と捉えるCast.の観察もあながち的外れとはいえない。事實この打診に對してディーウ要塞建設許可に對するポルトガル側の期待感は一方向的に増す。ところが結果的にはポルトガル側との交渉の妥結にバハードゥルは踏み切ろうとはしなかったのである。

打診に應えて一五三三年の雨期の終頃に總督から派遣された使者トリスタン・デ・ガー・Tristão de Gáがマンドゥーにいたバハードゥルのもとに到着した後、バハードゥルには豫想もつかない事件が起きたのである。すなわちフマーユーンに對する反亂に敗れ、幽閉されていたムハンマド・ザマーン・ミールザー Muhammad Zaman Mirza がバハードゥルのもとへと亡命してきたのである。フマーユーンからは彼の身柄引渡しを要求する使者がマンドゥーのバハードゥルのもとを訪れて、兩者の緊張は再燃した(CAN.i, 127; Cast.: VIII, lxy, 306; Chronica: 75; MS: 297; TA: iii, 227; TG: 2<sup>31</sup>)。この時すでにポルトガル側の使者はマンドゥーに到着していたので、和平締結をめぐる交渉は持たれてははずである。しかしムガル朝からの亡命者の身柄引渡し要求という新たな問題が発生して、バハードゥルの見通しは大いに狂ったものと推定される。自ら和平を打診し、ポルトガル側の使者を好意的に迎えたバハードゥルではあったが、この問題に何等かの見通しがつかない限り、その交渉にいかなる結論を出すこともできない。ポルトガル側との交渉の不調の原因はまさにこの點であつた(Cast.: VIII, lxy, 306—7; Chronica: 75)。

情勢より見て、當時のバハードゥルにはムハンマド・ザマーン・ミールザーを巡るムガル朝との確執の處理を行った上で、ポルトガル側との交渉に當る道筋も可能であつた。事實ムガル朝からの要求に應じてこの後、彼は二度目の使者を送ることになる(Chronica: 75; MS: 297; TG: 6)。しかしこの遣使の前にバハードゥルは既にディーウから傳わってくる不穩な情報を受けて、ムガル朝との懸案を未解決のまま、否應なくポルトガル側との交渉に引きずられていつていたのである。

## B マリク・ヒトガンの交渉

バハードゥルとトリスタン・ディ・ガーとの交渉にやや先立って、両者の交渉への動きを知ったディーウの支配者マリク・ヒトガンは、バハードゥルの意圖を疑った (Cast.: VIII, lxy, 307)。

マリク・ヒトガンが一五三一・三二年の雨期に二度にわたって、遠征中のバハードゥルに情勢報告を行っていたことは既に述べた。ポルトガル側の攻撃に晒されていたマリク・ヒトガンの状況から考えれば、これに對應するバハードゥルの措置を望んでいたことは明らかである。バハードゥルはしかし前述の如く一五三一年には内陸諸方面の遠征に没頭しており、ディーウへの對應にはさしたる關心は向けなかった。確かに前述の通り一五三二年の雨期明けにはバハードゥルはディーウに赴いてはいる。だが彼がディーウに到着した時、その海域から撤退しつづあつたポルトガル艦隊との間に戦闘は生じなかつた (Cast.: VIII, lii, 281; Chronica: 73—74; MS: 290)。マリク・ヒトガンからすればこのことはディーウの保護者としてのバハードゥルに強い疑念を抱かせたはずである。さらにこの時バハードゥルがディーウを去るに當つて行つたのは、同地に配置されていた大砲・百門をチートル攻圍のために移送したことである (Chronica: 74; MS: 290)。ポルトガル艦隊の撤退を見届け、かつチートルの遠征に當時最も強い關心を寄せていたバハードゥルとしては當然の措置であるが、ポルトガル艦隊の攻撃に晒され、かつそれに配慮も拂われないマリク・ヒトガンからすれば、これはバハードゥルに對する信頼感を失わせるに十分な行動であつたはずである。マリク・ヒトガンに「カンバーヤ王が自分に對して行っている不利益に仕返しをする」意圖があつたという記事はこれを裏付ける (Cast.: VIII, lxy, 307)。

また一方バハードゥルがムスタファ・アー・ミール・ミールにディーウの統治を委ねるのではないかとマリク・ヒトガンが危惧していたことも傳えられる。ムスタファ・アー・ミール・ミールは當時火器のエキスパートとしてバハードゥルの重く用いるところとなつており、その當時にはバルーチ・あるいはランデル・スーラトの港市を拜領してもいて、Cast. は彼がディーウの



支配者の地位を狙っていたことを伝えていたから、マリク・トガンのそうした危惧にも十分な根拠があるわけである (Cast.: VIII, xxxiii, 254; VIII, lxy, 307; VIII, lxxii, 321; Chronica: 70, 76; Correia: II, 495—6; ZW, i, 220)。

ディーウにおける諸權利をムスタファ・ルミーに奪われることなく、かつポルトガル側の脅威をかわすために選擇を迫られたマリク・トガンはポルトガル側との提携を模索することになった。「ポルトガル王への奉仕を行う」とのマリク・トガンの打診に應えて、總督からは八月初に使者が派遣された。この時期はマンドゥーでバハードゥルとトリスタン・デীগーとの交渉が行われていた頃であり、ポルトガル側はこの時點で二面外交を行っていたことになる。マリク・トガンに對してポルトガル側からは、ディーウへの要塞建設の許可が要求された。彼は拒否こそしなかったものの、これについての決斷を保留する (Cast.: VIII, lxy, 307—8; Correia: III, 496)。

### C ディーウ會見の設定 交渉の決裂

マリク・トガンのこの行動はほどなくバハードゥルの知るところとなった。これによって彼はマリク・トガンをディーウの知事から解任し、ムスタファ・ルミーをこれにあてることを決めた。しかしこの時點でマリク・トガンがポルトガル側といかなる交渉を持ったかについての情報を彼は持たなかったようである。それゆえ、要塞建設の許可に關する條約がすでにマリク・トガンとポルトガル側との間で合意されていたのではないかとの危惧を彼は抱いた。ディーウの支配者が自らの支配を嫌ってポルトガル側と手を結ぼうとしたことは、マリク・トガンの長兄マリク・イスハークの起こした一五二六年末の一連の事件でもバハードゥルの経験していたところであったから、彼のこのような危惧もあながち根據のないことではないのである。また自分の裏をかくかのようなポルトガル側の二面外交にも不信任感を募らせたはずである。バハードゥルは自分のもとにいたポルトガル側の使者を總督のもとに送り返して、ディーウでの會見を要求するに至る。情報不足が増幅する不安の中、彼がポルトガル側に傳えたのは以下である。

ディーウで自分と會見するために總督がやってくるのなら、總督が自分に要求する要塞【建設許可】を與えることは、自分の満足とするところである（Cast.: VIII, lxxii, 322）。

さらに續く記事においてディーウ要塞建設許可が、ポルトガル側が現在海岸諸地域において行っている掠奪行動の停止と引き替えであるとバハードゥルが考へていたと傳へられている。<sup>(32)</sup>バハードゥルにとってはマリク・トガンがポルトガル側と手を結び、ディーウが自分の手を離れることは最惡の成り行きであつたはずである。それよりは同地への要塞建設はポルトガル側に認めた上で、海上の安全を確保し内陸での事業を續行する上での可能な限りの實益を引き出そうとする苦肉の策であつたとバハードゥルの提案は判定されよう（Cast.: VIII, lxxii, 321—2）。

バハードゥルの打診を受けて、長年の目標の達成への道が開けたことにゴアの政廳は歡喜し、きわめて大きな期待とともに總督は艦隊を率いてディーウに向かつた。ところが提案にもとづいてディーウに到着していたバハードゥルの態度はその期待を全く裏切るものであつた。自ら提案しながら、バハードゥルは同年一二月にディーウに到來した總督との會談を凝りつづけたのである（Cast.: VIII, lxxiii, 323）。

この事情を直接に説明する記事を見つけないが、バハードゥルの腹心ムスタファ・ア・ル・ミーが既にディーウに入つて何等かの形でマリク・トガンからディーウの支配權を接收していたことなどの諸狀況から、事情の一つは以下のように推定できるであらう。すなわちディーウにおいてムスタファ・ア・ル・ミーはマリク・トガンがポルトガル側と行つた交渉の内容についての情報を得て、兩者の間に何等の合意も爲されていないことを確認した。これを傳へられたバハードゥルにはポルトガル側に要塞建設を許可する必然性はもはやない。それゆゑ、總督との會見を行わず、しかしポルトガル側との停戰狀態を積極的に破棄する必要もまたバハードゥルにはなく、自ら要塞建設の許可を提案した手前、八〇隻もの艦船を率いてきているポルトガル側の過剰な反應をも氣遣つてどちらともつかない不明瞭な態度に終始することを最善とした。これがバハードゥルが會見を拒否するに至る要因の第一であらう。

要因の第二はムガル朝との交渉の推移である。前述の通り、亡命者の扱いについてバハードゥルはディーウに赴く前にフマーユーンのもとに第二回目の使者を派遣していた。バハードゥル自身はこの遣使を通じての和平を望んでおり、その見通しにも樂觀的だったという。バハードゥルが「總督と何もなさなかった。というのは彼はモゴル人たち「ムガル朝側」ときつと和平を締結するに違いなかったからである」という情報が伝えられている(Chronica: 75-77)。そしてこの使者がフマーユーンのもとに赴いていた時期がまさにバハードゥルのディーウ滞留の時期なのである。ポルトガル側との和平よりムガル朝との和平を順序の上で優先していたことがこれにより確認できるが、一方總督との會見をバハードゥルが避けた事情についてもこれは示唆を与える。すなわち、たとえ樂觀視していたとはいえ、ムガル朝への遣使の結果が明らかにならないことにはポルトガル側への對應がとれないとバハードゥルは考えていたと判断される。結果的にそれはバハードゥルの會見拒否という形になり、ポルトガル側は年代記作者たちの記すように、彼のそうした行動の理解に苦しみ、これを彼の「陰謀」の現われととって憤激をあらわにする。バハードゥルとしてはムガル朝との問題が決着し次第、ポルトガル側との交渉に臨むつもりであったはずだが、「雨期を控えて、總督麾下のポルトガル艦隊は撤退せざるを得ず、ポルトガル側にきわめて強い不快感と不信感を残して交渉は挫折したのである(Cast.: VIII, lxiii, 324)。

このように結果的にはムガル朝との和平を優先したバハードゥルであったが、その目論見は、ムガル朝側がバハードゥルの使者の示した内容に不満を抱いて和平が成立しなかったことによって脆くも挫折する(MS: 297-99)。ポルトガル側ともムガル朝とも和平を取り結ぶことができないという最悪の状況に立ち至るのである。ディーウから戻った後、首都で使者の報告を受けたバハードゥルが「總督ヌーノ・ダ・クレーニャと何等の合意も得られなかったことを残念に思った」(Chronica: 77)という證言によって上の點は確認されよう。

## D 條約締結 バッセイン割讓

ディールから首都に戻ったバハードゥルはムガル朝に對して和平を結ぶための使者を今一度派遣した。一五三四年六月末にはバハードゥルは臣下をマンドゥーに派遣して、ムガル朝の軍の動きを探らせた。七月に入るとバハードゥル自身がマンドゥーに向かう(Chronica:77-78)。マンドゥーに到着したバハードゥルのもとにはムガル朝側からの最後通牒を携えて使者が到來していた。第三回目の交渉である。ムガル朝側は前回と同じくムハンマド・ザマーン・ミールザーの身柄の引渡しを求め、當方がグワリヤール *Gwalīyār* まで進軍していることを伝え威嚇を行った。この他マールワ地方に關してアフマド・シャーヒー朝の占領以前の原狀回復が要求された。しかしバハードゥルは第二回交渉の際のものより更に重い條件のこの要求を、當然のことながらのまず、ムハンマド・ザマーン・ミールザーの引渡しはまたも拒否、のみならずムガル朝側が先の盟約に違反してグワリヤールに軍を進めていることを非難し、さらに東方のアフガン諸勢力の動きに注意を促して暗に牽制を加えている(Chronica:78; MS:296-303)。結局この交渉は決裂し、軍内のローディー家の一派を中心とする主戦派の動きもあって、バハードゥルは一五三四年一〇月末から、ムガル朝側についていたチトールへの攻圍戰を開始する。チトール第二次攻圍である(Chronica:79; MS:306; TG:12)。

ムガル朝との開戦へと走り始めていた以上の状況においても、バハードゥルは背後のポルトガル側との外交問題にいまだ決着を付けられないでいた。この海上の問題に關して措置を講じる必要からバハードゥルが模索したカリクトとの對ポルトガル連携策も結果的には失敗に終わった。そして一五三四年一〇月には、グジャラート側との交渉の過程で一五三三年初頭から停止されていたポルトガル側の艦隊行動が再開されたのである。三五隻から成るポルトガル艦隊はダマンを攻撃、これを陥落させ、さらにディールウ沖に進んだ。再び開始された大規模な攻勢の前に、一五三四年一〇月末から一一月頃にかけてバハードゥルはバッセイン割讓をポルトガル側に打診する。ムガル朝との對決が避けられない状況である以

上、バハードゥルとしては多少不利な條件であってもポルトガル側との関係を安定させる必要があったのである。交渉の過程は明らかでないが、ディーウへの要塞建設許可についてはグジャラート側は譲らず、バッセインに關して大幅譲歩を行うことで妥結、一五三四年二月二三日、バッセインの割讓などを取り決めた條約が締結された。これによってバハードゥルはポルトガル側の攻勢を凍結することを得た (Cast.: VIII, lxxiii, 339—40; TEL: 134—138)。<sup>(33)</sup>

以上の敘述から明らかにされるように、バハードゥルにおいてはムガル朝との對決もポルトガル側との和平もまたポルトガル側との交渉の難航も、當初から意圖されていたものではなく、外交上の力學とその複雑な成行きの產物であった。その意味でバハードゥルにとってバッセイン割讓はなし得るぎりぎりの選擇であつた。ゆえに一連の局面を通説のごとく「ムガル朝と對決するためにポルトガル側にバッセインを割讓して和平を得た」と單純に説明付けることはきわめて表面的な説明といわざるを得ないのである。

## 五 ディーウ要塞建設許可

チトール第二次包圍に並行して、バハードゥル麾下にあつたローディー家の一派がバヤーナ Bayāna に進撃、スィークリー Sikrī でムガル朝軍に撃破された。これによつてアフマド・シヤヒー朝とムガル朝との對決は決定的となつた。フマーユーンは一五三五年一月二〇日にグジャラート親征を決斷、同年二月一八日には首都近郊を出發した (HN: 36—7, 39)。チトール近郊でこれを迎え撃つたバハードゥルは二箇月にわたる戰鬪の末、自らの麾下のムスタファ・アールミーの寝返りによつて敗れ、マンドゥーへ逃亡する。同地で和平が模索されるがこれは實現せず、バハードゥルはさらに逃亡、首都チャンパーニールに籠城部隊を残して、カンバーヤト Kanbayāt から海路でディーウに逃亡すること辛うじてフマーユーンの追撃を逃れた。ディーウには同年六月半ば頃に到着したものとされる (AN: i, 132; MS: 307—9, 313; TG: 13—17, 19; TSG: 64; ZW: i, 241, 243)。

この後一五三五年八月初に、首都が籠城戦の末にムガル朝軍の手に落ちたことは、ムガル朝軍のディーウ進撃に對して備えることをいよいよバハードゥルに迫るものであった（AN:i, 141—2; Cast: VII, cviii, 379; TG: 29）。その備えとは具體的にはディーウでの籠城戦を射程に入れての同地の防備の増強である（ZW:i, 243）。バハードゥルがディーウ要塞建設許可の問題を含む交渉の打診をポルトガル側に行うのはまさにこの時期であった（Cast: VIII, ic, 365）。これをうけて一五三五年一〇月二五日にグジャラート側とポルトガル側との間で、ポルトガル要塞建設許可及びポルトガル側からグジャラート側への兵員供與の取り決めを含む條約がディーウで締結された（Cast, VII, ic, 365; VIII, ci, 368—9; TEL: 220—223）。さて以上の如く、ポルトガル側に要塞建設が許可されるという局面が開かれたのが、バハードゥルがディーウの防備態勢を整えようとしていた時期であることは注目されねばならない。というのもその事實によって、條約で合意されたポルトガル側の要塞とそれに附隨する兵力にバハードゥルが期待していたのはディーウの防備態勢の一部としての働きであったことが自ずと明らかになるからである。ポルトガル要塞構築に關わる一萬クルザードという多額の資金をグジャラート側がポルトガル側に提供していたことはそのことに對する有力な状況證據である。ポルトガル側が長年の宿願としてきたディーウ要塞建設は、同地での來るべきムガル朝に對する籠城戦において自らの戦力に同要塞を取り込もうとするグジャラート側の意圖において實現されたということになる。條約においてグジャラート側とポルトガル側とは、おのおのが意圖していたことは別として、ディーウにおける軍事力の確保という事項のごく表面的な點においてのみ利害の一致を見たにすぎないわけである。<sup>(35)</sup>ゆえに、ポルトガル要塞を自らのディーウ防備の一環と見なすグジャラート側と、長年の勞苦の末にようやく勝ち取った成果として自らの要塞を維持し更なる進出への足がかりとしたポルトガル側との間に、意思の食い違いとディーウにおける各々の行動の齟齬とが生じるのも蓋し當然であつた。この矛盾は條約締結後まもなく噴出する。

一五三六年初から二月にかけて、ディーウにおいてはポルトガル要塞の構築が完了しつつあり、一方グジャラート各地

をムガル朝軍が席卷していた。この頃バハードゥルはディーウのポルトガル要塞の横に城壁の建設を行おうとした。グジャラート側の史料において、バハードゥルがディーウにおいて防備施設の構築を行わせたとされることとこれは符合するものである (ZW.i, 243)。だがポルトガル側はこの行動を、バハードゥルが要塞建設を許可したことを後悔したことによるものであり、同要塞占領のための據点作りだと捉えたのである。ポルトガル側はこの城壁の建設を認めず、一方バハードゥルの側も「自分が總督と和平の契約を結んだ際には、要塞を建設するのを許可する以上のことを認めたわけではないし、彼に對して服従することを認めたわけでもない」と猛反發、條約で取り決めた兵員供與をポルトガル側が行っていないことを持ち出して非難する。これを受けて持たれたバハードゥルと總督との直接交渉も、城壁建設については詭辯の弄し合いに終わり、兵員の供與についても雨期明けには果たすとして先伸ばしになった (Cast. VII, cxxi, 398—400)。結局城壁建設はバハードゥルが折れる格好で中止されたが、一連のこの事件は兩者の合意の下にあった意圖の齟齬を浮き彫りにするものであった。

兩者の意圖がかくの如く錯綜しながらも、結果として強力なポルトガル要塞は一五三六年二月末には完成した (Cast. VIII, cxxiv, 404)。しかしこの要塞はグジャラート側から見ればディーウ防戦のための一戦力なのであるから、ひとたび情勢がムガル朝軍とのディーウ攻防戦の可能性を脱してしまえば、グジャラート側がこれの排除に動き出すのは當然のことであった。グジャラート側とポルトガル側との雙方にとって誤算であったのはムガル朝軍があまりにあっけなくグジャラートを撤退したことであった。一五三六年四月—五月に始まる雨期を通じてムガル朝軍はグジャラートから撤退し、これに對するグジャラート側の追撃も奏效する中で、バハードゥルは首都に歸還する (MS: 318—19; TG: 29—32; ZW.i, 258—260)。(36) 條約締結まではディーウ要塞建設許可を巡って動いてきた兩者の外交關係はこれ以後ディーウのポルトガル側要塞に對するグジャラート側の働きかけというかたちにその枠組みを変えたのである。

ムガル朝軍を掃討したバハードゥルはディーウに戻り、ポルトガル要塞の奪取を試みる。雙方の間での緊張が高まる中

で、一五三七年二月一三日總督とのディーウ沖の船上での會見に際して生じた騷擾から逃れる際にバハードゥルは海中に没して行方不明となった。この後一五三八年・一五四六年、二度にわたってグジャラート側はディーウのポルトガル要塞を攻圍するが目的は達し得ない。一五三九年の條約においてディーウの關稅收入の三分の一を、一五四〇年のこの條約の改定においては同二分の一をポルトガル側が取ることが定められた。一五五四年にはポルトガル側はディーウの島全體の統治權を掌握、一五五五年にはディーウの關稅收入の全てを掌握して、ディーウの「征服」を完了した。しかしこれら一連の出來事の敘述は本稿の範圍外である。

## 結

本稿の敘述において得られた點を約言すれば以下の如くである。一五二〇—一年の事件においては關係の構圖はディーウ對ポルトガル側である。この構圖は一五二六年のスルターン・バハードゥルによるディーウ掌握によつてアフマド・シャーヒー朝對ポルトガル側へと變化した。一五二〇—一年以來、ディーウないしアフマド・シャーヒー朝のポルトガル側との諸關係は武力抗爭である。特にディーウ掌握後のスルターン・バハードゥルにおいてその對決姿勢は明確であり、その様相は兩者の間のディーウ爭奪ゲームと規定できる。しかしポルトガル側の進出を可能にしたのはこれにおける軍事上の勝利ではない。本稿の敘述より明らかな如く一連の戰鬪においては通説に言われているようなポルトガル側の軍事上の壓倒的優位は認められない。一五二〇—一年以來の一連の事件が教えるところ、ポルトガル側の進出は基本的にはその武力ではなく、グジャラート側の内部事情あるいは外交關係の結果として初めて可能となりえた。そして一五三五年の要塞建設許可や一連の條約における馬輸入條項の如く、ポルトガル側の進出をむしろ利用する政治・軍事上の利害もグジャラート側に生じ得た。

しかしこのような利害の一致を、後に續く一連の抗爭が流し去ると、結果としてディーウのポルトガル要塞のみが歴史



の表面に残り、これがポルトガル側からは英雄的征服のしるしとして、グジャラート側からは「フアランギーの犬ども」の謀略の證としてそれぞれに諸史料によって單純化され、強調されていくのである。

またこれらの諸點をピアスン氏の研究との比較において位置付ければ、ポルトガルの貿易管理を可能にしたのは海上の問題に對するグジャラートのスルターンの無關心であるという氏のテーゼには完全に反對するところに本稿は行き着いた。支配者の倫理觀ないし社會的諸集團の關係という一般論で一六世紀グジャラートという特殊具體的な場を説明しきることにはやはり無理がある。但しポルトガル側の進出とはグジャラート側が「政治上のシステム」の一部をポルトガル側に「委讓する」ことであるという氏の發想には、一五三五—六六年の事件や馬條項を根據に同意できる。以後ポルトガル側の據點が存續し、ムガル朝が海軍力を直接には持たなかったことに關してその視點は示唆を與える。(39) これについては今後の個別具體的研究にまたねばならない。

## 註

- (1) 彼についで詳しくは Aubin: 5-9; Mathew: 24-40.
- (2) ピアスン氏の所論の基本は一九七六年の著作において盡くされていると言つてよい。グジャラートの海關稅收入の國庫收入に占める割合の少なさ、支配者と商人とが分離しているというグジャラートの社會的諸集團の關係、土地・人民の支配を重視する支配者の倫理觀などを根據として、グジャラートの國家が海上貿易に積極的には關與せず、海軍力を事實上有しなかったとする氏の所論に對しては、すでに長島弘氏によつていくつかの部分的批判がなされているのでそれを参照(長島 一九八四)。海上貿易に對するインドの諸國家の姿勢の問題に關しては長島氏のみならず、例えばグジャラートからの綿製品の貿易において果たされたムガル朝公權の大きな役割を認める H. W. ファン・サンテン氏の所論もあり、ピアスン氏の所論と對立するところである (Van Santen 1991)。
- (3) しかし本稿では單に便宜上の理由から曆法には原則として西曆を用いる。また煩雜さを避けるため A. C. などの特記は行わない。
- (4) ピアスン氏はグジャラート側の諸集團を商人と支配者とに分ける必要を力説している。しかし本稿において扱われる諸史料からはこの兩者を峻別する根據を見出すことができなかったで、このスタンスは取らない。政治史という本稿の關

心からしてもこれを取る必要はない。またポルトガル總督の麾下にはポルトガル人だけではなく、「マラバール人」や「カナリン人」などの現地人もいることがあった。だが本稿ではこの點を問題にはしない。

- (5) カンバーヤ Cambaya, Cambaia は本来、港市カンバーヤト Kanbayat の名である。ポルトガル語史料においてはこより轉じてグジャラート地方全體をさす語として用いられる。またアフマド＝シャーヒー朝スルターンは「カンバーヤ王」の語で登場する。

- (6) 「當時國王が彼ディオゴ＝ロベス〔總督(任一五一五—一二一)〕が取り組むべしとるかに促していたのは、ディウウの町に要塞がひとつ、カンバーヤ王と同地の領主メリケ＝アズ〔メリク＝アヤーズ〕との合意にもとゞき建設されること、同意がなければ武力によって獲得すること(中略)であった。」(Barros: III, iv, 7, 109a)

- (7) メリク＝アヤーズのこの工作は Correia: II, 635 によっても傳えられる。

- (8) Pires の以下の記事もキワーム＝アルムルクの高い地位を確認せよう。「王に次ぐ主要な領主たちは異教徒の Mjagubim [Malik Gopi] で、その次は Chamale Malec [Qiwām al-Mulk] で、その次は Asturmalec [ʿAḍud al-Mulk] で、四番目は Codaudam [Khudāwand Khān] で、五番目は Pires: 366/41; 『東方諸國記』: 110)。

- (9) TA はこの戦役に對してグジャラートから艦隊が派遣されたことは傳えない。キワーム＝アルムルクが騎兵を率いてマ

ーヒーム Mahim まづ進んだがなすところなく撤退したことを傳えるのみである。

- (10) ペルシア語史料にはマリク＝フリー＝シルなる人物が確認される (MS: 286: Malik ʿAlī Shīr b. Qiwām al-Mulk)。これを寫したと思われるのが Chronica: Melique Liger; Correia: Meliqueler である。Chronica, Correia 及び Melique Liger/Meliqueler の父がキワーム＝アルムルクであると明言している。ところが Correia は Meliqueler と明らかに別人として Alixa をもキワーム＝アルムルクの息子として挙げる。Alixa, Halixa, Alixiah の形は Correia のみならず Barros, Cast, Couto が用いる。ただ Barros, Cast, Couto はキワーム＝アルムルクと Alixa の父子關係に言及しない。兩方の形を用いるのが Correia のみであることと諸史料での現われ方とを考え合わせると Malik ʿAlī Shīr と Alixa の兩者が同一人物である可能性である。だが史料操作のための積極的な根拠がないので、ここでは Correia を全面的に採用し、Qiwām al-Mulk には Malik ʿAlī Shīr, Alixa の少なくとも二人の子がいたものと考ええる。そして兩者ともグジャラート艦隊の主たる指揮官であった。
- (11) ただし一五一四—一六年のいずれかの時期に處刑されたメリク＝ゴビービーは一五二二年當時むろん在世していない。だが行論において確認される事柄の性質上、このことはあつて問題にならないと思われる。

- (12) 彼の活動について詳しくは Aubin: 9-12; Mathew: 9-23 を参照。

- (13) Barros: II, ii, 9, 92; 『アジア史』1:203. 譯文は『アジア史』に據る。ただし『アジア史』の「メリケ・イアス」・「パロシェ」はそれぞれ「メリケ・アズ」・「パロシェ」と読み變えた。
- (14) ムザッファルへの遣使の指揮を總督から委任されていた人物は、アルブケルケ執政期においても交渉のためにアフマド・シヤーヒー朝の宮廷に赴いていた（この事情については Aubin: 47-58）。そして彼が同宮廷の内情を實見していたことは明らかである。遣使の指揮の委任は彼のこうした経験が期待されてのことであることは疑いない。
- (15) マリク・アヤーズは、ディーウのポルトガル商館の存在をむしろ歓迎していたようである。その理由は同商館がもたらす海上貿易からの収益であった（cf. Barros: III, iv, 7, 109b）。
- (16) 「ルーム人」Rumes はポルトガル語史料においてはポルトガル側の假想敵たるオスマン朝麾下の人々を總稱する用語である。この語は Turquos, Turcos と同義であり、兩者ともエスニック上・地理上の歸屬を意味するものではない。
- (17) 木材は艦艇の材料として戦略物資の扱いを受けていた。バセイン・ダマンがその主な積み出し港であった（Ribeiro 1962: 183, Torre do Tombo, Corpo Cronológico, Parte I, M. 60, Doc. 37, 一五三七年二月八日附、ヌーノ・ダ・リーニャの國王宛て書簡: Pearson: 20）。これが假想敵である「ルーム人」の手に渡っていたのだからポルトガル側の警戒は當然である。
- (18) ただしこの打診に對してポルトガル側はきわめて懷疑的であった。マリク・イスハークとの交渉に積極的な總督ロボ・ヴァス・デ・サンバイヨ Lopo Vaz de Sampaio（任一五二四—二六）に對して、總督の下のカピタンたちの會議は「インディア總督が不確實なことのたにに向くことはよろしくない」という態度を取った（Cast: VII, vi, 14）。このことは、一五二〇—二一年の事件以來の兩者の對立の経緯の反映として注目されねばならない。
- (19) 税關は要塞併置である。ゆえにマリク・イスハークの提示においては、要塞引き渡しに關稅收入に關わる權利が伴っていたことになる。ただし史實の上でポルトガル側がディーウの關稅收入の一部を得ることが初めて取り決められた一五三九年の條約におけるきわめて詳細な規定（TEL: 229-232）と合わせ見るとき、マリク・イスハークの提示の具體的な内容がいかなるものであったのか、不明ないし不自然な點はきわめて多い。またディーウ側にとつてきわめて嚴しいこのような條件をマリク・イスハークが何故提示したのかについても判斷が難しい。
- (20) グジャラート側の情報には以下のように傳えている。「そののち九三三年ラビーウ・アル・アッワル月一五日（一五二六年二月二〇日）のこと、スルターン・バハードゥルは狩りをするお積りでカンバーヤトの方へ向かわれた。カンバーヤトにお着きになったとき、前述のマリク・アヤーズの息子たちの一人のイルヤースという名の者がやつて來て、スルターンに拜謁した。そして申し上げた。『我が長兄イスハークがソ

ーラトのザミーンダルたちのたぶらかしに乗って、五千騎とともにディーウの港の近郊にやって來ました。彼の心づもりは詐欺・策略によりディーウの島に上陸し、その後兵士であろうと商人であろうとそのまちに在るムスリムである者を追い出して、ディーウを邪惡なる異教徒たちに安堵せしめようというものでありました。提督 (mir bahar) マフムード・アーガーはこの情勢を知ったので、艦船に銃砲を扱う兵士たちを乗り組ませて、これに對抗しました。これらの艦船は一齊に砲撃を行い、多くのヒンドゥーたちを殺しました」(MS: 265-66)。

ディーウにおいてその支配者たるイスハークが外から同地を攻撃しているという一見不可解なこの記事はポルトガル語史料と突き合せることではじめて辻褄が合うわけである。

(21) マリク・イルヤースの消息は不明である。バハードゥルへの介入要請以降、諸史料には現われない。

(22) 意味不明。英譯は奴隸 slave と譯す。escravo と讀んだものと思われるが根據は不明。

(23) 同時代についての情報ではないが、ディーウがスカンダル支持派すなわちビービー・ラーニーと政治的關係を持っていたことを推測させる情報もある。一五一四年にポルトガル側がスルターン・ムザッファルに遣使した際、當時のディーウ支配者マリク・アーヤーズはビービー・ラーニーに「賄賂」を贈り、ディーウに不利な要塞建設をポルトガル側に許可しないようスルターンに働きかけることを求めたとされている (Braz: IV, xxiii, 229)。

(24) Correia: III, 272 はマリク・イスハークがスカンダル殺害に關與したとされたことがバハードゥルの壓力の原因であったとし、Chronica: 58-9 も同様のことを暗示する。しかしスカンダル支持に傾いていたと思われるマリク・イスハークの立場を考えると、彼がスカンダル殺害に關與していたと考えるべき積極的根據は他史料から補えない。ただしスカンダルの殺害者を討つということがバハードゥルの大義となり得た情勢を踏まれば、マリク・イスハークの關與説が壓力の口實として持ち出されたことは十分に考え得る。

(25) 一方、ニザーム・アルムルク政權と同盟關係にあったポルトガル側からの軍事上の支援を斷つためであったというチャウベ氏の指摘もある (Chaube: 175-95)。

(26) 一五二九年五月六月頃には、バハードゥルがカンバーヤトで新たな艦隊の建造をさせていたことが確認できる (MS: 271)。同年末から翌一五三〇年の雨期の始まりまでの間にスーラト・ランデル・ダマン・アガシ Agashi といったキャンベイ灣岸の諸港市へのポルトガル艦隊の掠奪・破壊行動を許している (Cast: VIII, vii-ix, 204-08; Couto: IV, vi, 9, 89-95)。

(27) ムスタファール・ルーミーのディーウへの亡命をめぐる一連の事情については、Serjeant: 56-59; ZW: i, 219-20 及び Mughal: 247-248 を参照。なおムスタファール・ルーミーのディーウ到來の時期について MS: 274 は一五三〇年九月であるとしているが、より近い立場から記されている Serjeant: 57 が、一五三〇年二月四日に彼がイェメンを出發したこ

とを傳えていることから、誤りと判断される。また諸史料との整合性から Corea: II, 520 の一五三二年二月二七日説も採用できない。

- (28) Pearson: 90; Boxer: 49. ディーウ側の勝利は、ディーウの城塞の堅固さとムスタファー・ルーミーのもたらした火砲の威力による結果である。Cast. が伝えるポルトガル側の敗北の状況は著者自身がこの戦闘に参加しているが故にきわめて信頼できるものである。Serjeant: 59 はポルトガル艦隊のうち、四〇隻が撃沈され、二〇隻が捕らえられたと傳えている。

- (29) 「破壊が甚大だったため、諸港からは誰も航海しようとはしなくなった。そしてこのことは例年税収を上げていたディーウの税關の税収に對してこの年たいへんな損害をもたらした原因であった。また必需品および灣【キャンベイ灣】の對岸からやって来るあらゆるものたいへんな缺乏も起こった。」(Cast.: VIII, xlv, 273)

- (30) この遣使の時期について AN, ZW はいずれもヒジュラ暦九四〇年(一五三三・七・二三〜一五三四・七・一二)とする。Chronica: 75 から判断すれば、少なくとも兩期が終わるまでの時期にこの交渉が確定していなければならぬのだから、遣使は同九四〇年のきわめて早い時期であると推定しなければならぬ。同年の事件としてこの遣使を最初に取り上げる AN の書き方はこの推定を裏付ける。

- (31) ムハンマド=ザーン=ミールザの反亂・亡命の時期は以下のように確定される。反亂はヒジュラ暦九四〇年にデー

ーにおいてディーン=パナーの建設が行われる後である(CAN: I, 124)。QH: 845 はディーン=パナーの建設について、同九四〇年ムハッラム月半ばに工事が始まり、同年シャッワール月後半にはほぼ完成していたとしている。また諸史料では、ムハンマド=ザーン=ミールザは反亂失敗後、バヤーナに幽閉されたが、同調者の手引により脱走、バハードゥルのもとに向かったとされる。諸史料にはバヤーナ幽閉の時期・期間が傳わっていないけれども、一五三三年の兩期の終わり頃(ヒジュラ暦九四〇年サファル月頃)にはマンドゥーのバハードゥルのもとに彼が到來しているのだから(Chronica: 75)、ムハンマド=ザーン=ミールザの蜂起はディーン=パナー建設開始のすぐ後に發生し、失敗鎮壓され、彼自身はバヤーナの砦に幽閉されたがすぐに脱走、バハードゥルのもとへと亡命したということになる。さきのバハードゥルの遣使からは多く見ても二箇月弱しか経っていない。グジャラト政権とムガル朝との和平關係が續いたのはごく僅かなその期間のみであった。

- (32) ただし Cast. はこれに續けてこの提案におけるバハードゥルの謀略を示唆する。この評價にはあくまで事後のポルトガル側の大方の受けとめ方は反映されていると思われるが、バハードゥルの實際の意圖としては探ることはできない。

- (33) ポルトガル側の艦隊行動はこのあと確かに一五三四年から一五三五年にかけて停止されていたことが確認される(Ribeiro 1958: 234, Torre do Tombo, Coleção de S. Lourenço, Vol. I, ff. 294, 一五三五年一月一日附、デー

ウ發' Marim Afonso de Sousa から國王宛の書簡)。

- (34) ただしこの建設資金供與に關する條項は條約には存在しない。また一萬クルザードが多額と評價される根據は以下である。一クルザードはさまざまに變動するが、さしあたり一五一七年の公定換算率 1 cruzado = 400 reis をとると、一萬クルザードは 4,000,000 reis。これに對して例えば一五二五年のディーウの支配者マリク・イスハークの諸支出が約 17,000,000 reis (LCI: 154-5)、また一五六〇年代末のある年、ディーウのポルトガル要塞の總支出額が 11,303,440 reis であった(OEI: 186) ことと比較すれば、一萬クルザードという數が、たとえ概數だとしても、相當の金額であることは確かである。

- (35) 兩者の利害の一致しえた事項として更に指摘しうる點がある。海路を通じてグジャラートに輸入される軍馬の確保をポルトガル側がグジャラート側に一定程度保證する、一五三五年の條約の一條項である。戰略物資たる軍馬輸入をグジャラート側に保證する條項は、この條約のみならず、前年一五三四年の條約及び一五三七年・一五三九年の兩條約においても必ず言及されている。インド洋貿易においてグジャラートへの軍馬の輸入量がきわめて少なかったという通説に照らすと、きわめて近い時期に締結された條約におけるこの條項の頻出は筆者の目にはいささか異様に映る。その背景には、グジャラートの北方ないし西方に位置する、ムガル朝をはじめとする諸政權との政治的對立によって陸路を通じての軍馬確保が困難な狀況にあったグジャラート側と、馬貿易の管理を

意圖していたポルトガル側との利害の一致を想定しうるのである。ともかくこの點は同時代の貿易網の枠組み全體の中でも捉え返されるべき問題であると思われる。Gommans 氏の近著には一八世紀におけるインドの馬貿易についての言及が多くあり參考になる。

- (36) その原因としては 一、ヒンドゥースターン方面でのシール・ハーンをはじめとする諸分子の不穩な動向、二、ムハンマド・ザマーン・ミールザーのラーホール侵攻、三、グジャラートに駐留していたムガル軍内の内紛があげられる(AN: i, 135, 144-5, 148; MS: 318; TG: 30-32; ZW: i, 248, 257)。

- (37) とりわけ二度にわたるディーウ包圍の防衛戦はポルトガル海上帝國史においては英雄的事業と見なされた。ポルトガル語の年代記作者たちはその敘述にたいへんな分量を割いている。また戰鬪に参加した者の著した記録やディーウ攻圍に題材を取った敘事詩など個別の文獻も多く現われている。

- (38) MS: 320-21; TSG: 70-71; ZW: i, 257-8 などの記事がその例であると見なされる。

- (39) しかしその「委讓」を生じさせるのはピアスン氏の言うような「支配者の倫理」「社會的諸集團の關係」という公權のアプリオリな要因ではなく、そのときどきの政治・經濟・軍事上の利害であることは嚴に注意せねばならない。ピアスンの所論のエッセンスのひとつは國家公權と商人との間に斷絶を見出すところにあるように思われる。だが筆者は行論の結果により、これを共有しない。むしろ「貿易は純粹な經濟

時勢といつて西の国にたはるるをいふ、世の變遷・世事のた  
 へるの勢はなかりたふといふべし。ふつとトハニキナハ  
 へるの世にたはるるの勢なり。

# 参考文献

## 一 本文

- AN: Abu al-Fadl, *Akbar Nāma*, ed. by A. Ahmad Ali & M.  
 A. Rahim, 3vols, Calcutta, 1873-86.  
 Barros: João de Barros, *Da Asia de João de Barros*, (Década  
 II, ed. by L. F. Lindley Cintra, Lisboa, 1974; Década III,  
 Lisboa, 1992 [fac-simile]); 綜體 (銀) 11. 6-7 頁 村田繁雄  
 『ポルトガル 全 13 巻 解説』 1. 24-25-26 頁。  
 Braz: Braz de Albuquerque, *Commentários do Grande Afonso  
 Dalbuquerque*, ed. by A. Baitão, Coimbra, 1922-23.  
 Cast.: Fernão Lopes de Castanheda, *História do descobri-  
 mento e conquista da Índia pelos Portugueses*, ed. by  
 Pedro de Azevedo, 9vols., Coimbra, 1924-33.  
 Chronica: Diogo de Mesquita, *Chronica do reyno de Gusa-  
 rate*, ed. by S. C. Misra & K. S. Mathew, with tr. by F.  
 A. Mendonca, Baroda, 1981.  
 Correia: Gaspar Correia, *Lendas da Índia*, ed. by Lima  
 Felner, 4vols., Lisboa, 1858-1866.  
 Couto: Diogo de Couto, *Da Asia de Diogo de Couto*, Décadas  
 IV-XII, vol. 9-24, Lisboa, Regia Officina Typographica,  
 1777/88.

HN: Gul-badan Begim, *Humāyūn Nāma*, ed. with tr. &  
 introduction by A. S. Beveridge, London, 1902.

LCI: Anonymous, *Lembranças das cousas da Índia em 1525*,  
 in R. J. de Lima Felner (ed.), *Subsídios para a história  
 da Índia Portuguesa*, Lisboa, 1868.

MS: Shaykh Sikandar b. Muhammad Manjūh, *Mir'at-i Sikan-  
 darī*, ed. by S. C. Misra & M. L. Rahman, Baroda, 1961.

Pires: Tomé Pires, *Suma Oriental que trata do Mar Roxo  
 ate os Chins*, ed. & tr. by A. Cortesão, *The Suma  
 Oriental of Tomé Pires and the Book of Francisco  
 Rodrigues*, London, 1944. 4-5 = 2. 26 (村田繁雄) 『東大  
 雜圖記』 解説 1. 24-25 頁。

QH: Khwāndamīr, *Qānūn-i Humāyūnī*, ed. by M. H. Husain,  
 Calcutta, 1940.

Ribeiro 1958: L. Ribeiro, 'O primeiro cerco de Diu', *Strelia*,  
 1, 1958, 201-271.

Ribeiro 1962: L. Ribeiro, 'Preâmbulos do primeiro cerco de  
 Diu', *Strelia*, 10, 1962, 151-193.

Serjeant: R. B. Serjeant, *The Portuguese off the South Arabi-  
 an Coast*, Oxford, 1963.

TA: Nizām al-Dīn Ahmad, *Tabaqāt-i Akbarī*, ed. by B. De  
 & M. H. Husain, 3vols., Calcutta, 1913-1941.

TEI: Simão Botelho, *Tombo da Estado da Índia*, in R. J.  
 de Lima Felner (ed.), *Subsídios para a história da Índia  
 Portuguesa*, Lisboa, 1868.

- TG: Shāh Abū Turāb Walī, *Ta'rikh-i Gujārāt*, ed. by E. D. Ross, Calcutta, 1909.
- TSG: Sayyid Maḥmūd Bukhārī, *Ta'rikh-i Salāṭin-i Gujārāt*, ed. by A. A. Tirmiz, in *Medieval India Quarterly*, 5, (1964), 33-72.
- ZW: 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Umar al-Makkī al-Āṣafī Uluḡh Khānī (Hājī al-Dabir), *Zafar al-Wāṭih bi Muzaḡfar wa Ālih*, ed. by E. D. Ross, 3vols., London, 1921-28.
- 二六八號
- Aubin, J.: 'Albuquerque et les négociations de Cambaye', *Mare Luso-Indicum*, 1 (1971), 3-63.
- Boxer, C. R.: *The Portuguese Seabone Empire*, New York, 1969.
- Chaubé, J.: *History of the Gujarat Kingdom*, New Delhi, 1975.
- Gommans, Jos J. L.: *The Rise of the Indo-Afghan Empire*, c. 1710-1780, Leiden, 1995.
- Mathew, K. S.: *Portuguese and the Sultanate of Gujarat (1500-1573)*, Delhi, 1986.
- Mughul, M. Yakub: 'Türk Amīralī Emir Mustafa ibn Behram Bey'in Hindistan Seferi (1531)', *Tarih Enstitüsü Dergisi*, 4-5 (1973-4), 247-262.
- 長崎縣立——「一六〇一十七世紀のシヤラートと海上貿易と國家——」W・N・ビブレン氏の所説をめぐって——『長崎縣立國際經濟大學論集』一八——(一九八四)八七一—一八。
- Pearson, M. N.: *Merchants and Rulers in Gujarat*, New Delhi, 1976. 生田滋謙『ポルトガルとインド 中世のシヤラートの商人と支配者』東京、一九八四。
- van Santen, H. W.: 'Trade between Mughal India and the Middle East, and Mughal Monetary Policy, c. 1600-1660', in K. R. Hellequist (ed.), *Asian Trade Routes, Continental and Maritime*, London, 1991, 87-95.



comprise the means used to inflict injury, the position of the wound, and the state of the wound. These specifications are thus rather objective. However, the specification of two degrees of injury classified cases according to a category of “straight” (直) or “crooked” (曲). As such, this specification was subjective in nature, as it called for decisions to be rendered based on consideration of “extenuating circumstances”. Because of this element of subjectivity inherent in such a specification, the scope and application of this condition tended to be expanded in consideration of the personal advantage of officials.

## GUJARĀT AND THE PORTUGUESE IN THE FIRST HALF OF THE SIXTEENTH CENTURY A. D. —Relations Concerning the Port City of Dīw—

MASHITA Hiroyuki

Following the conflict in 1508 between the allied forces of the port city of Dīw in Gujarāt and the Mamlūk dynasty, on the one hand, and forces of the Portuguese fleet off Chawl, on the other, a Portuguese fort was established at Dīw in 1536. My purpose in this paper is first, to confirm and describe the train of events leading to the extension of the Portuguese in Gujarāt, with particular emphasis on a political, rather than economic or cultural interpretation. Second, through a description of these events, I hope to clarify the structure and nature of the relations that pertained between Gujarāt and the Portuguese. In this paper, I will focus in particular on the period from 1520—1536.

My conclusions from a discussion of these events are as follows. Relations between either Dīw or the Aḥmad-Shāhī dynasty and the Portuguese had been characterized by conflict involving military force since 1520. Particularly after his occupation of Dīw (1526), Aḥmad-Shāhī Sulṭān Bahādur assumed a position of distinct rivalry against the Portuguese. The events of this era were interpreted as a game played on both

sides for possession of Dīw. However, what made Portuguese extension possible was not military victories in this contest. Within the series of battles that characterized this conflict, there exists no basis for the common assumption of the overwhelming superiority of Portuguese military force. Portuguese extension could not have succeeded until the internal conditions and diplomatic relations of Gujarāt allowed for this. Moreover, there also existed political and military interests through which Portuguese extension created conditions advantageous to Gujarāt.